稚内市教育研究所

研究所だより

NO.6

発行日:2023.8.17 発 行:稚内市教育研究所
〒097-0012
稚内市富岡1丁目1番2号(風~るわっかない)
TEL・FAX:0162-73-6386
E-mail:wak-kenkyujo@abelia.ocn.ne.jp

特別支援教育支援員研修会

7月14日、特別支援教育支援員を対象とした研修会を実施しました。昨年度は新型コロナウィルス感染症により延期、その後中止としたため、2年ぶりの開催となりました。

教育委員会　山川忠行学校教育課長の挨拶に続き、稚内市教育相談所の植木典彦就学前教育アドバイザーに「幼保の状況と小への接続に向けて」と題し、次のような内容でご講話いただきました。

「出生数は減少しているが、就学指導対象者が元年度以降徐々に増加している。ここ5年間では情緒面の相談が最も多くなっている。保育所や幼稚園では集中させるための工夫や数や文字を意識させた活動の工夫などアプローチカリキュラムが改善されている。特に、子どもが保育者を信頼するよう、自己肯定感を高める支援（叱らない、わからせていきながら褒める）に心がけていることに感心する。活発に動き回る子も保育者が名前を呼ぶとすぐ戻って来て、その後、話をするのを取り入れていた。小学校でも取り入れて欲しい。

稚内市の就学指導の基本的な流れと対象保護者への結果報告のあり方については課題となっている。

4、5月に1年生の参観を行ったが、支援員・副担任等複数での支援体制を整えたり、ベテラン教諭を配置したり、学校全体で支援をしている。一方、幼保の生活と小学校の生活では大きな段差があるので、スタートカリキュラムをどう作っていくのかが課題であると感じている。…(続きは右記をご覧下さい。)」

参加者感想

○幼稚園と学校の情報共有、提供の大切さなどがわかり勉強になりました。そして、改めて支援員の役割、仕事を確認、認識することができました。「何をしているの！」ではなく、「どうしたの？」を忘れず、日々子どもたちに寄り添っていきたいと思います。
○植木先生による講話を聞き、子どもたちに寄り添い、自己肯定感を高めるために「叱らず、ほめる、認めてあげる、わからせる」支援の大切さを再認識することができました。
○幼稚園から小学校へ上がり、小学校で学ぶ集団生活で大変な子は、困っている子なんだと改めて思いました。周りが成長していく中で、教室で苦痛を感じる、立ち歩き抜け出す・・・何か必ず理由があるから。その理由をわかってあげたい、うまく寄り添ってあげたいと思っていますが、難しいことが多々あります。困っている子に限らずですが、みんなに声をかけ、何気ない会話をすることを心がけています。何もできないのですが、ほんの少しでも安心できる時間になればと思っています。

特別支援教育支援員(以下、支援員)の役割

・ 通常の学級に在籍する発達障がい児童生徒への対応の充実を図ること

支援員の主な仕事

・ **授業における個別支援**(ノートテイク、指示の確認、用具準備、課題取組への援助)
・ **生活面、安全面に関する支援**(移動補助、身辺の介助)
・ **心理的安定や適応促進に関する支援**(クールダウン、相談)
・ **支援対象者のための個別的な教材作成**
・ **校内巡視による声がけや様子の変化等の把握**

気をつけること(支援員)

①個人情報の取り扱いについての心得
知りえた情報について学校以外の場所で話題にしない。保護者がいない時に勝手に本人に伝えたりしない。支援員を辞めた後も同様。

②学級担任等の授業の補助について
何らかの事情で担任等が教室から離れてしまった場合も、支援員がその授業を引き継ぎ、代替して行うことはできない。教員免許を所持している場合でも教諭・講師としての配置ではないので、授業は行えない。

気をつけること(学校)

③効果的に支援してもらうための学校体制
校内委員会等で、学担やコーディネーター等と支援員が、どのような連携・協力をするのか事前に決めておくこと。特定の児童生徒の担当として、「全ておまかせ」では効果的な支援は望めない。

まとめ

①幼保小の子どもの状況や環境を共有しましょう。
②就学児の保護者の不安や心配を受け止めましょう。
③稚内市の就学指導の課題も押さえましょう。
④その上で、1年生が入学して来たら、
・ **学校や担任等の方針や取組を共有し、**
・ **積極的に子どもの困り感を引き出し、子どもにしっかり寄り添うことを大切にした支援に心がけましょう。(褒めること・承認すること)**

以上、植木先生の資料から引用・抜粋

小高・中学校グループ進行・助言
教育相談所所長　本間正博氏

小中学年グループ進行・助言
教育相談アドバイザー　坂本孝行氏

小低学年グループ進行・助言
就学前教育アドバイザー　植木典彦氏

後半は、担当学年による３グループ、小低学年、小中学年、小高・中学校に分かれて、具体的な事例について、どのような支援を行うのが良いのか経験を語り合ったり、より良い支援について考えたりするなど、熱心に交流・協議が行われました。

グループ交流の進行・助言は、教育相談所の皆さんにお願いをしました。日頃から学校・園や保護者から様々な教育相談を受け、児童・生徒への支援について取り組んでいる方々なので、参加者の話に耳を傾け、参加者同士の話をつないだり、必要な助言をしていただいたりしました。「支援が必要な児童・生徒に個に応じた適切な支援を行えるよう個別の指導計画を担任等と支援員とが共有し、どのような連携や協力をするのか共通理解を図っておくことが重要」というお話もありました。植木アドバイザーの講話の中でも、「学担やコーディネーター等と支援員が、どのような連携・協力をするのか事前に決めておくこと」、そして支援員と共有することの大切さが語られていました。支援員と先生方との勤務時間が違うこともあり、情報共有の時間をつくる難しさがあると思いますが、各校では何かしらの工夫をされているのではないでしょうか。

時には明るい笑い声が響いたり、大きく頷きながら話を聞く様子が見られたりと、皆さんの熱心さにグループ協議を終えるのが申し訳ないくらいでした。感想にも、「交流時間が少なく残念でした」という声がありましたので、次回以降に生かしたいと思います。参加いただいた皆さん、助言者の皆さん、ありがとうございました。

参加者感想

○皆さんとの交流がとても楽しく、勉強になりました。先生方がとても明るく、とても元気をいただいて、また、がんばろうという気持ちになりました。子どもたちの気持ちを大切に、寄りそっていきたいと思います。
○担任の先生がいなくなるとにぎやかになって、私ではおさめられないということについて、たくさんアドバイスをいただきました。「できたでしょ」「特別だよ」「○○名人（をつくる）」「ここだけ手伝うから、あとは自分でね」と言ってがんばってもらう等。少しずつ成長するのを待ちながら、見つけて声かけがんばってみようと思います。
○3、4年生になると自分で考えて行動することを見守る難しさがでてくる事、どこまでの声かけが必要か？この仕事は長いですが、日々模索しています。年々・・・？幼さが残る子が増えてきていて、自分で解決する力がない、解決する気もない？人（担任や支援員に）任せる子が多い気がします。
○支援員の人数が限られているので、手がまわらないこともあります。担任との「ほうれんそう」はしていますが、先の見えない支援だなと感じることもあります。が、日々子どもたちの為と思い接しています。
○他の参加者の方も色々悩んだりしていて、自分だけじゃないんだな～と思ったり、なるほど！と参考になることもあり勉強になりました。
○日々、支援員の役割、あり方等理解していても、実際クラスの子どもたちやグレーゾーンの子どもとの関わりで悩みながら勤務していますが、子どもたちにとって何が良いことなのか、時には自分発信で先生方と情報を共有しながら業務に携わっていこうと思いました。
○いつも同じような話になってしまいますが、それだけ、なかなか改善されていかない・・・ということだと思いました。私たちは、授業ももちろんできませんし・・・。人手も足りない・・・というより、それだけ大変な子どもたちが増えているということです。5，6年前だと、クラスに1人もしくは2人なら多い方でした。（支援対象の子）きれい事は言えない・・・現場はそんな状況です。学校全体で見てあげたくてもクラスの中で手が足りない。それでも、他の学年の支援対象の子にも目を向け、寄り添います。どれだけの方が（保護者）この状態を把握し、想像し、理解し協力してくれるのでしょうか。先生方も自分たちの仕事以上の事をしていると見ています。
○いつも一生懸命な子どもたちの姿を見て、私も元気をもらっています。
○低学年のグループでしたので、❝あるある❞がわかりやすく、大変勉強になり、また、これからも子どもの気持ちに寄り添い、頑張ろうと前向きな気持ちになれました。アプローチも子どもによって変わりますので、今回の研修で引き出しの数を増やすことができました。
○他の小学校の支援員の方々と様々なお話が聞けて、思いも共通できたと思います。このような研修を通して、自分も新しい情報や知恵をいただき、今後に活かしていきたいと思います。
○久しぶりに研修会が開催され、各校の支援員さんのお話が聞けて、『大変なのは自分だけじゃない。』と勇気づけられました。
○それぞれの悩み、子どもたちと真剣に向き合う姿勢、とても勉強になりました。
○近い担当学年の方とのグループ交流が良かったです。今回は中学校の支援員の方とお話することができて、卒業した子の「その後」を聞くことができました。
○担当学年の近い支援員たちと、現状や悩み等を交流し、様子を知ることができて良かったです。
○同じ中学年の支援に入っている方々と交流することで、同じ悩みや考え方などを共有でき、また頑張ろうという気持ちになれました。